

# 体育の授業と評価および部活動の問題点

梅垣浩二<sup>1</sup>・小野伸一郎<sup>2</sup>

要旨：体育授業の内容や部活動の指導について、新学習指導要領の観点から、見直すことを試みた。自己に応じた課題の設定ができるように指導はできているが、その課題をいかに解決するかという指導は不十分であり、今後の課題である。また生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続できるためにも、さらに生涯の体力のベースとなる青年期の体力を高めるためにも、部活動の5年間の継続性が重要であり、そのための全学的な合意形成と支援が必要である。

キーワード：学士力、学習指導要領、コーチング

## 1. はじめに

高専の教育は、高等教育機関といえども大学とは異なり、中学卒業後の学生から対象とすることから、ある意味特殊であると考えられる。ある意味とは、専門・一般の学科・部門にかかわらず、高等学校での教育改革を見据えつつ、また一方で大学での教育改革も参考にしながら、舞鶴高専独自の教育を築かなければならないということである。著者らはそのように考えている。

高等学校においては、平成21年3月に高等学校学習指導要領が改訂された<sup>1)</sup>。各教科などの解説<sup>2)</sup>には、その冒頭に共通して改訂の経緯が述べられており、「生きる力」という考え方が継承されている。(この新学習指導要領は、平成25年度から年次進行により段階的に適応されるが、総則の一部や数学・理科など部分的に前倒して適応される。)体育においては、運動に関する領域を(1)技能、(2)態度及び(3)知識、思考・判断に整理し、技能を詳細に提示し、体育理論との関連で運動に関する領域においても知識(技能を身に付ける際の勘や直感・経験に基づく知恵などの暗黙知、技の名称や行い方、体力の高め方なども含む。)の習得や、指導と評価の一体化を示している。また他の教科や専門学科としての工業においても、学習内容の習得にとどまることなく、探求する能力や関心・態度を養うことを重視しているものと思われる。

大学においては、高等学校のような指導要領はないものの、機関別認証評価や分野別認証評価の評価基準が、それに相当するのではないかと考えられる。分野別認証評価として高専ではすでにJABEEを実施しているが、認証評価が2期目を迎える平成23年度からは全ての学部において分野別認証評価を導入することが

検討されており、文部科学省は日本学術会議にコア・カリキュラムの作成を依頼した<sup>3)</sup>。そのような流れの前に中央教育審議会は、分野横断的に学士課程教育が共通して目指す学習成果についての指針として、あるいは学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)として、「学士力」という概念を提示している。「学士力」とは4分野13要素について定義しており、4分野とは知識・技能・態度・創造的思考力である。まさしく、高等学校の指導・評価の観点と一致している。

時代の要請として、あるいは子どもたちの教育・育成の要点として、文科省あるいは中教審の立場としては、知識・技能・態度・思考や判断が一致して挙げられるのは当然かもしれない。立場を変えれば、厚生労働省は就職基礎能力(5分野13要素；コミュニケーション能力、職業人意識、基礎学力、ビジネスマナー、資格取得)を、経済産業省は社会人基礎力(3分野12要素；前に踏み出す力(アクション)、考え抜く力(シンキング力)、チームで働く力(チームワーク))を挙げている。著者らはあくまで高専という教育機関である以上、教育の立場として、体育のカリキュラムや評価を、学習指導要領や学士力に共通する観点から見直すこととする。

## 2. 体育の目標

1―3年生の保健体育の目標は、旧学習指導要領の保健体育科の目標を参考にし、「健康・安全や運動についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の増進と体力の向上を図ることを目的とする。」としてきた。

新学習指導要領<sup>2)</sup>の保健体育科の目標は、「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的、計画的な実践を通して、生涯にわた

1 舞鶴工業高等専門学校 自然科学部門 講師

2 舞鶴工業高等専門学校 自然科学部門 准教授

って豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力のある生活を営む態度を育てる。」と記述されている。傍点が新たに加筆された部分であり、計画的な実践とは、自己に応じた目標・課題の設定とその解決や評価が行えることを示しており、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続するとは、運動学習に対する主体的な取り組みを促すことが学校の教育活動全体に運動を積極的に取り入れ、卒業後においても実生活や実社会の中などで継続的なスポーツライフを営めるようにすることを示している。学校の教育活動全体に運動を積極的に取り入れるとは、課外活動や部活動も含まれると考えられ（大学では運動部活動も課外活動として位置づけられているが、高校では運動部の部活動と課外活動は全く別物である。新学習指導要領では、総則第1款の3の課外活動だけでなく、総則第5款の5(13)においても部活動が教育課程として明示された。）、旧来のように教科としての体育や特別活動の学校行事としての体育的行事による指導が生涯にわたって主体的に運動に親しむ力を育てるのではなく、スポーツ享受能力(教科体育)とスポーツ環境創生力(教科外体育)を並行して育成していかなければならないという考え方が今日では一

般的である。

4—5年生の保健体育の目標は、上記のスポーツ環境創生力の育成や生涯にわたるスポーツライフの継続を見据えて、「生涯にわたる健康維持のために、1. 継続的な運動・スポーツ実践の重要性を理解する、2. 運動・スポーツの安全な実施方法を身につける、3. 自主的な運動・スポーツの実践を通じて運動・スポーツに親しむ態度を体得する。」としてきた。

1—3年生、4—5年生のそれぞれの目標の方針に変更はないが、今後多少の文言等の整合性を図る必要性はあるだろう。

### 3. 体育の内容

体育の内容は、1章で述べたように、運動に関する領域では(1)技能、(2)態度及び(3)知識、思考・判断で構成される。また、2章で述べたように、運動の合理的・計画的な実践のためには、自己に応じた目標・課題の設定とその解決が不可欠である。

測定競技である陸上競技や水泳競技は、もちろん態度も重視されるが、記録の相対評価で成績が決まりやすいと考えられる。ここでは陸上競技を例に、自己に応じた目標を設定し評価を行う手順を紹介する。

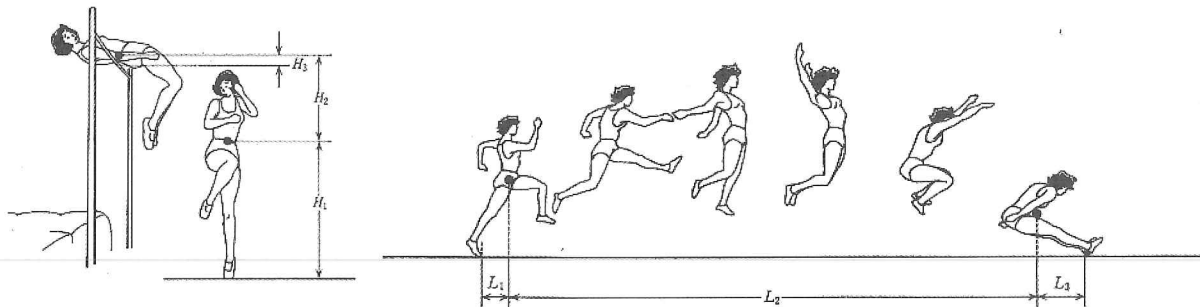


Fig.1 The components of High Jump and Long Jump record

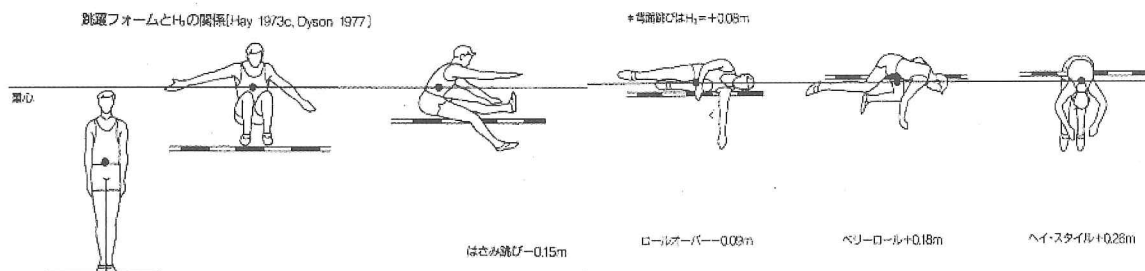


Fig.2 The bar clearance of each High Jump technique

走高跳や走幅跳の記録は身体重心の移動距離<sup>4)</sup>だと考えると、Fig.1のような距離の和で構成される。走高跳では、Fig.2のように立位時の身体重心高を身長<sup>5)</sup>の55%とし(H<sub>1</sub>)跳躍時重心高からバーまでの高さを垂直跳びの記録から20cm引いたもの(H<sub>2</sub>-H<sub>3</sub>)<sup>5)</sup>を自己に応じた目標として、学生たちに提示している。この個人目標よりも高い記録を達成できることが技能の評価と関連し、単に体格差や垂直跳びの能力差を間接的に評価するだけにならぬようにしている(Fig.3)。

また走幅跳では、L<sub>2</sub>が記録のほとんどを占めており、助走時の身体重心の速度を踏切時に至適な方向へ向けることが、技能の評価と関連する。助走時の身体重心の速度を高める能力は、50m走の記録から最高速度として推定する。また、至適跳躍角を16度<sup>5)</sup>として自己に応じた目標を設定し、この個人目標と実際の記録の差を評価できる(Fig.4)。

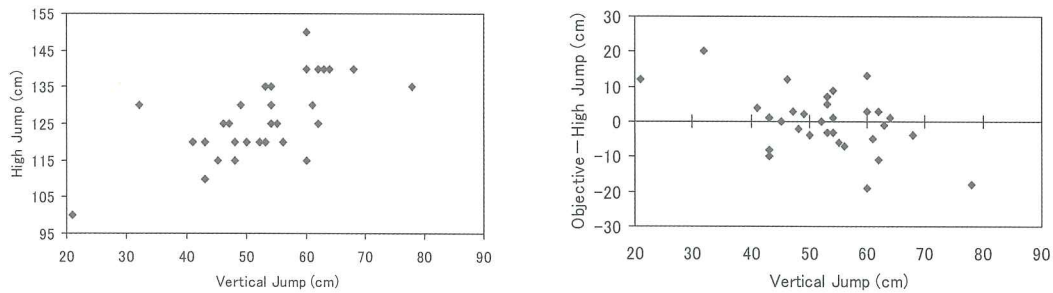


Fig.3 Relation between vertical jump and High Jump and between vertical jump and the objective - High Jump

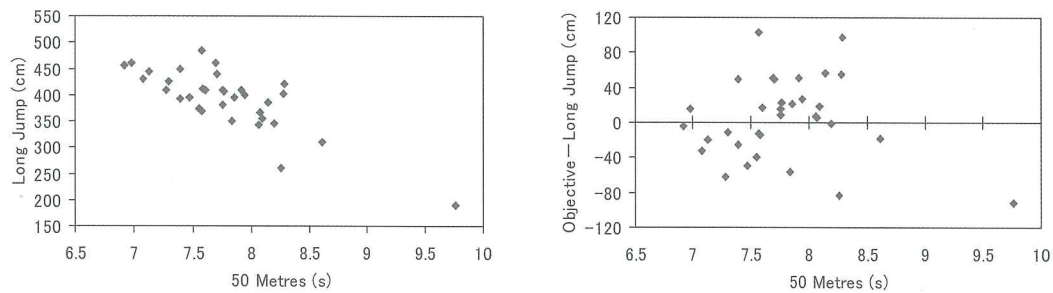


Fig.4 Relation between 50 metres and Long Jump and between 50 metres and the objective - Long Jump

名前	ファウル	マーク・スイッチ	ディフェンスリバウンド	ファーストブレイク	セカンドブレイク	アシスト・ポスト	シュート
1							
2							
3							
4							
5							
6							
1							
2							
3							
4							
5							
6							

Fig.5 The score sheet of game performance assessment on basketball



サッカーやバスケットボールなどの球技は、シュート本数やリフティング回数など、個人技能で成績が決まりやすいと考えられる。新学習指導要領では、球技の内容は、各種目名からゴール型・ネット型・ベースボール型と分類している。ここではゴール型を例に、チームや自己の能力に応じて作戦や戦術を設定し評価（ゲーム観察・分析、Fig. 5）を行う手順を紹介する。

サッカーでは広い空間でオフサイドというルールを守りながらいかにゴールへ攻め入るか、バスケットボールでは速攻を主体としながらいかにフリーになれる空間を作り出してシュートするかが、各チームの作戦や戦術となる。そのためには、経験者が司令塔となってチームのメンバーの能力を活かし、メンバーはチームの攻撃・守備を理解して動くことが、技能の評価と関連する。実際の試合でゲーム観察・分析<sup>6)</sup>を行いながら、積極的にゲームにかかわろうとしている機会を見出すことに努めている。このようなゴール型の、空間を操作する仲間との連携した動きの学習は、4年生で行われるフライングディスクのアルティメットでも必要とされる。

いずれの例も、まだ指導と評価が十分に一体化されておらず、自己に応じた課題を設定していても、その課題の解決方法や自己評価にまでつながる授業展開はできていない。教員が技能や態度を一面的には評価できていても、学生が知識を経験に基づき十分に理解して思考・判断を行う、そのような授業展開を実現することが、今後の課題である。

#### 4. 5年間の教育期間と個別指導

2章で述べた、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育成することによって、卒業後に少なくともひとつの運動やスポーツを継続できるようにすることが、体育としての最終的な目標である。もちろん健康・体力の保持増進を図ることができることも最終的な目標であるが、これは運動やスポーツを継続した結果として実現できることであろう。

生涯の体力のベースとなる二十歳前後のピーク体力を高めることや、スポーツに対する肯定的な価値観を身につけるためにも、運動部の部活動が果たす役割は非常に大きい。これは運動部に限らず、文化系も含めた全ての部活動の教育的効果は、正課の教科の教育的効果をさらに高めるものとして、大変重要であると考えられる。中学・高校の3年間や大学の4年間よりも長い高専の5年間の教育期間で、その効果を活かさないことは不利である。平成21年度高専体育大会で、団体種目であるバスケットボール競技に、本校男子バスケットボール部が近畿地区で優勝して全国大会へ出場したことは記憶に新しい。これは優秀な選手やコーチをスカウトしてチームを強化したわけでもなく、その

要因のひとつとして5年生の学生の5年間の努力の成果も挙げられるだろう。

一方高専における部活の指導は、様々な校務や研究による多忙化によって、厳しい状況にある。本校においても同じような状況だと推測され、指導の現場に立たれている教員の労力は大変なものだと想像される。また学生は部活動において、部員数、指導者、施設などの充実を望んでおり<sup>8)</sup>、本校においても同じような状況だと推測される。

スポーツの指導は「コーチング」とも言われ、その役割も多岐にわたる。もちろん技術指導（個人技能・集団技能）・戦術指導・練習法の指導もしなければならないが、チームとしての組織化を図ること（役割分担）、人的物的社会的環境を整えること（周りからの期待や支援）、競技者としてだけでなくひとりの人間として育てることも忘れてはならない<sup>9)</sup>。実は技術・戦術・練習法の指導以外の部分が重要であるからこそ、企業のマネジメント教育としてコーチングなどの言葉が引用されることが多いのではなかろうか。ただし、教員と学生の信頼関係は、頻りに顔をあわせて、紆余曲折を経ながら、数年の期間をかけて築かれるものだといえよう。過密なカリキュラムの解消<sup>8)</sup>と、学業と部活動の5年間継続の促進こそが必要である。そういう視点を持って、本校のカリキュラムや教育システムの改善や全学の合意形成を行わなければならない。

以前FDの講演で「ティーチングからラーニングへ」というテーマがあった。学生が主体的・積極的に学ぶということを意図しており、アクティブラーニング（能動的学習）ということであろう。その時教員はどうすればいいのだろうか？ 知識を授けることが教科の任務であって、関心や態度はあって当然であり、それは学生の問題であるとするのでいいのだろうか？ 著者らは「ティーチングからコーチングへ」だと感じている。コーチングとは、学生の「気づき」を引き出すことで、一斉指導ではなく個別指導でしかできないことである。そして学生にとっては、「ラーニングからアクティブラーニングへ」と変身させたい。個々の学生のレベルに合わせて課題を設定して、関心や態度を育成することこそ、コーチングでなければならないことであろう。そういう長期にわたる親密な関係を築きうる教育システムが、部活動だけにとどまらずゼミ指導なども含めて、学内で活性化することに期待したい。

#### 参考文献

- 1) 文部科学省：高等学校学習指導要領，2009。
- 2) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編，2009。
- 3) 全国大学体育連合・日本体育学会共催シンポジウム：中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」をどうよむか，2009。

- 4) 阿江通良：跳のバイオメカニクス，日本陸上競技連盟編 陸上競技指導教本—基礎理論編—，大修館書店，pp. 45-48，1992.
- 5) 深代千之：跳ぶ科学，大修館書店，pp. 40-47，pp. 59-70，1990.
- 6) 高橋健夫：体育授業を観察評価する，明和出版，pp. 58-68，2003.
- 7) 飯田清志：適正な高専運動クラブ指導とは何か，論文集「高専教育」第27号，pp. 621-626，2004.
- 8) 坂田洋満，清野哲也，高橋邦夫，大内俊二：木更津工業高等専門学校におけるクラブ活動に対する意識及び実態について—学生及び教官のクラブ活動意識調査から—，論文集「高専教育」第27号，pp. 637-642，2004.
- 9) 日本体育学会体育方法専門分科会シンポジウム：「コーチング学」の再考に向けて，2009.  
(2009. 11. 6 受付)

5. 英文表題，英文著者名，英文要旨等

PROBLEMS ON THE CURRICULUM AND ASSESSMENT OF PHYSICAL EDUCATION  
AND ON THE CONTINUANCE OF THE CLUB ACTIVITIES IN MNCT

Koji UMEGAKI and Shin-ichiro ONO

ABSTRACT: We tried to reconsider the physical education curriculum and assessment, and the continuance of the club activities in Maizuru National College of Technology according to the altered points on National Curriculum Standards for Upper Secondary School in 2009. We could show the individual objective to each student but not show the way to achieve the individual objective well. It is assumed that the continuance of the club activities for five years must encourage the students to enhance their physical strength based on their lifelong health and to enjoy their sports life as long as they live. The realization of this assumption will need an agreement among the teachers in our school.

**Key Words:** *Diploma policy, Curriculum, Coaching*